

サンドラ・ビューチュラー著／

川畑直人・鈴木健一監訳 梶山彩子・ガヴィニオ重利子訳

『精神分析臨床を生きる』

——対人関係学派から見た価値の問題——

(創元社・二〇〇九年五月)

藤原 雪絵



本書を紹介するにあたって筆者に思い浮かぶのは、熱い、潔い、強い、面白い、そして、豊かな、繊細なという形容詞群である。今まで臨床心理学の専門書からは得られなかったことが

詰まっている一冊であると思う。既存の理論に迎合することなく、自分の臨床感覚をはっきり言葉にした刺激的な内容となっているのだ。

このような本になったことには、著者と監訳者の人柄と臨床に対する姿勢、それに加えて対人関係学派がもつ特徴が大いに関係していると思うので、まずそれを紹介したい。

対人関係学派とは、H・S・サリヴァン、E・フロム、C・トンプソンといった米国の精神科医、心理学者によって基礎付けられ、ニューヨークのウィリアム・アランソン・ホワイト研究所（以下WAWIと表記）を中心に、現代に引き継がれている精神分析の学派の一つである。著者であるビューチュ

ラー氏はWAWIの分析家であり、精神分析家として開業する傍ら、訓練生の授業やスーパーヴィジョン、個人分析を担当しておられる。監訳者のお二人もWAWI訓練生時代に氏のスーパーヴィジーであり、氏の臨床に対する姿勢から多くのことを学んでこられたWAWIの分析家である。原題の *Clinical Values* を『精神分析臨床を生きる』と訳すあたりからも、本書はただの翻訳にとどまらないことが窺える。著者の情熱、姿勢、ひいては対人関係学派のもつ精神を真に伝えようという監訳者の思いもこめられた一冊になっていると言えるのではないだろうか。

筆者はビューチュラー氏に三度お会いしたことがある。あとかきにも記されているが、氏はとても小柄で、笑顔のチャームिंगな女性である。しかし、話してみると、その臨床に打ち込む姿勢には圧倒される。本書では、治療者が面接に自分の人生経験を投入し、自分が生きる姿勢を臆することなく患者に示すことの重要性が何度となく主張されているのだが、氏はまさにそれを体現しているような人である。今まで、いや、今現在も、治療者が患者に与える影響について考えることは、中立性の名の下に忌避されがちである。それをしっかりと見据えて患者のために生かしていこうと明言し、実践する氏の決断と姿勢は、患者だけでなく、多くの臨床家にも影響を与えることだろう。

本書は「好奇心」「希望」「親切」「勇氣」「目的感覚」「感情のバランス」「喪失に耐える力」「統合性」「理論を生かす」という九つの章からなっている。いずれも私たちが日常慣れ親

しんだ言葉である。過度に専門用語を使うことを無味乾燥だと切り捨て、自分の言葉で実感を語る語り口には、本当に患者にとって、臨床家にとって意味のあることを伝えようという強い姿勢が窺える。

平易な文章で書かれているからといって、決して入門書の類ではなく、理論よりも情熱を偏重するような主張がされているわけではない。こういったことは読めば明白だろうが、それでもなお、その熱心さ故に情熱的に過ぎると感じられる読者もおられるかもしれない。そこまで考えていられない、引き受けられないと感じる臨床家が多いことは事実だろう。しかし、実際にそれをやり抜き、生き生きと人生を送る臨床家達があり、彼らが患者達の人生に貢献しているということ、そして心のどこかで彼らをうらやましいと思っている自分がいることもまた事実なのではないだろうか。

大好きなビューチャー氏の著作なので、随分熱く賞賛した感が否めないが、それだけの影響を与えられる分析家が書いた本だということをご容赦いただきたい。

臨床経験を、そして人生を積み重ねていく中で、何度も何度も折に触れて読んでいきたい本である。是非皆様にもお勧めしたい。

(ふじわら ゆきえ／臨床心理学)